続・念願達成の正念場

その二

田宮　治

大輪、見事咲く

初日に全員で打ち立てた「犬殺しの荒猪獲り」を目標に頑張ってきたが、その第一の念願をものの見事に達成した。一四七キロの見たこともない猪に全員が喜び、焼き肉や奥様の手料理でうまいビールを飲み、話がはずんだ。

こんな時でないと話しても決して分からない猪撃ちの現実をくどいほど北嶋氏と話し合う。今日は泊まりなので、「明日はお前が撃つのだぞ！」と何度も念を押す。

子供たちにも、「明日はお父さんが猪を獲るからね」と告げる。そのそばで奥様も「大丈夫かな」というように心配顔である。「必ず撃ちますよ」と、またビールをあおる。本当に猪撃ちでよかったと思う至福の時である。

猪猟の醍醐味を全員でかみしめ、うまいビールの味と最高の興奮が醒めやらぬ十二月二十日、またしても今猟期一番の大獲物＝大イベントが切って落とされたのである。日曜日とあって、大猪獲りの知らせで駆けつけた棟方さんも加わって五名である。

快晴の、またとない猟日和の中、北嶋氏がてきぱきとタツを言い渡している。私は六頭の中から昼前に使う三頭の犬たちと、猟具などを入念に用意しながら、いつものように聞きもらさないようにしていた。

北嶋氏が決めた山は、何と昨日、大猪を獲った山続きで、初猟で地元猟人の犬たちを切りまくった大猪がいたという、まさにその猟場である。北嶋氏は、本当に犬殺しのその大猪と戦うつもりらしい。

確かに昨日獲った猪は大き過ぎて、犬たちを切ったという一〇〇キロくらいの猪ではない。地元のベテラン猟人が一〇〇キロと言っているのだから、見間違えるはずがない。

私は「北嶋君、張り切ってるな。よし、よし、その調子」とニヤニヤしていた。いつもすべてを北嶋氏に任せているが、彼の説明によると、よくやる山で、私と北嶋氏が勢子らしい。タツもうまく張ったようで、なかなかのものだ。

北嶋氏は一戦一戦、確実に実力をつけている。特に今年から入った三十歳の加藤氏が急成長を遂げていて、いつでも一生懸命である。北嶋氏とは近い将来、良いライバルになりそうである。

またとないような無風の日だまりの中、猪跡を見ながら北嶋氏の軽トラに六頭の犬たちを乗せ猟場に向かう。初日、私が落としたジープのぶざまな姿を思い浮べながら、その細い道を通る。ここから先は私の車は入れないので、いつも軽トラに乗せてもらっている。

いつもの渡りに、小物だが入り跡がある。薄暗い大杉の根元に車を止め、そのことをタツに連絡する。一番タツは平野氏のようで、今日のタツは三人であるが、止め犬に合わせた狭い猟場を囲む配置のようだ。

小峰伝いに北嶋氏を先に狩り込み孟宗竹の中に入ると、手入れのしない大竹が至る所に倒れていて歩くこともままならないが、あちこちに新しい猪の掘り起こしがあり、今にも出そうな所である。

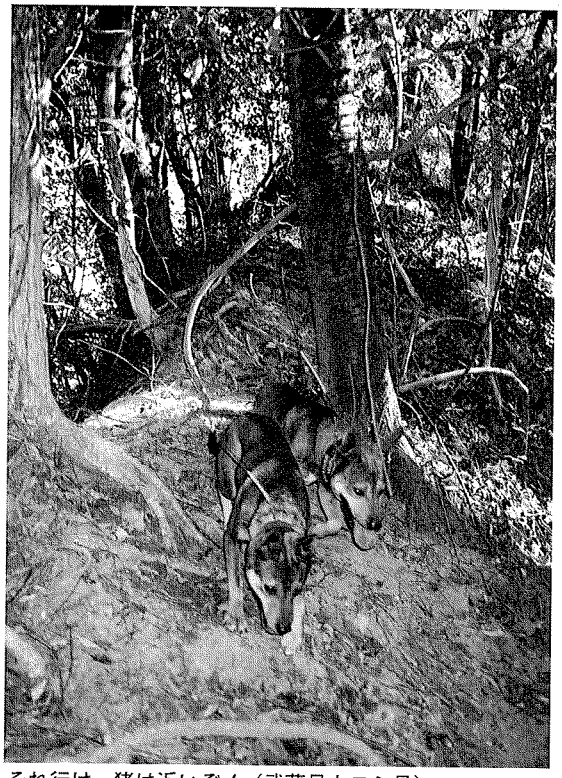
「ここが犬切りの現場だ」と北嶋氏が言うが、なるほどと思う良い猟場である。「必ずいるはず」との信念で猟場の隅々まで狩るが、

大猪どころか、入り跡の小物も出なかった。

仕方なく早めの昼食をとり、改めて二回戦の作戦となった。タツは大きく移動しないで現状に近い所に張り、北嶋氏と私が反対の山から、いつも猪が逃げ込む一戦目の孟宗竹の山に追い戻すように狩るやり方である。孟宗竹の中にあった新しい掘り跡は確かに昨夕のもので、猪は遠くではない、反対側の山にいると思ったからである。

二回戦はいつもやっているように犬たちを変えて、大猪でも必ず勝てる三頭にした。一回戦の犬たちだって当然のこと、荒猪でもびくともしないカツ号、ブイ号、武蔵号の三頭だったのだが、止め犬での勝負は、疲れの出ないうちに戦わせるのが何よりの勝因となる。無傷で快勝させるために私がいつも心掛けている作戦である。

何となく二回戦は猪の獲れる予感がする。猪猟でもツキのようなものがあって、昨日大猪を見事に寝屋止めして撃たせてくれたヨシ号、シロ号、マロ号の出番である。



それ行け、猪は近いぞ！（武蔵号とヨシ号）

ここのところ加藤氏がラッキーボーイであるように、猪が獲れる時の犬群がこの三頭という巡り合わせである。

反対側の猟場はこのグループのよくやるコースで、戻られたのも、二発かけて逃がしたのも、この猟場である。大杉林と真竹藪が至る所に点在し、勢子は大変な所でもあるが、山は知り尽くしており、猪の寝屋もヌタ場も勝手知ったものである。

寝屋を一つひとつ、犬たちを入れてつぶしていった。一回戦の何倍も大きな山だが、昨日の気持ちを前面に押し出し、狩り残しのないように注意して狩っているのだが、いつも必ず出る所でも猪は出なかった。犬たちの頑張りで猪の出ない日はないほどであったが、珍しく一回戦は出なかった。

「いないね」

「どうしたのだろう！」

二人で顔を見合わせ、諦めかけていた。

あと少しで終わりになる最後の大峰の下で小休止。ドリンクを飲み、ミカンを頬張る。残っているのはこの峰だが、悪いことに、ここは昨日狩って大猪を獲った、まさにその現場である。

大杉林の中は気持ちまで暗くなるようで、北嶋氏が諦めたのか、「このまま杉林の小道を通って車に戻ろうか」と言い出す。私も心細くなったが、これだけ狩っても猪が出ないのだから、昨日狩った山ではあるが、食み跡を残した猪はこの峰のどこかに必ず潜んでいなければならない。その猪をこれから追い出して、北嶋氏に猪撃ちの基本である寝屋止めで最高のチャンスを与えてやりたい。そう思って、残った小峰に賭けていた。

「北嶋さん、もう少しだから、あの峰伝いに狩りながら車に戻ろうよ」

最後まで頑張ることを教える。北嶋氏も思い直したようで、元気に「そうだね」と狩り始めた。三頭の犬たちが元気なうちに確実に寝屋止めして決して逃がさず、しかも三頭ぐらいならば、猪は藪の中でも撃ちやすい。今日は北嶋氏が寄って撃つのだから、これが一番良い犬たちの使役法でもあるの

だ。

犬たちはそんなことまで知っているかのように杉林の中を突っ走り、峰めがけて登って行った。

犬たちを追うように、小峰伝いに十五分くらいでなだらかな頂上に出た。右下二〇メートルが、昨日大猪を獲った現場である。その中へバリバリと音を立てて三頭が入っている。犬たちは猪を撃ち獲った現場には必ず立ち寄るものであるが、全犬の動きが急である。

「いるわけないよなあ……」

それにしても、真竹藪を上に下にひっかきまぜるように狩っているので、注意して犬たちの様子を見ながらゆっくりと二〇メートルくらい進み、車まで三〇〇メートルくらいのどん詰まりまで来てしまった。

その時である。わが耳を疑うようなヨシ号の寝屋止め鳴きである。「ワン、ワン、ワン、ワン」と、静けさを突き破る見事な寄せ鳴きである。

「猪だよね」

二人でギョッとした。まさかと思うような、願ってもないチャンスを、またしても犬たちは作ってくれたのだ。絶対に諦めなかったので、思ってもみなかった、こんな場所に潜んでいる猪を探し当てたことになる。既にマロ号もシロ号も寄りついて、完全な寝屋止め状態になったようで、素晴らしい止め鳴きが山々に響き渡っている。私は三頭の鳴き声で、この猪はいただきだと確信した。

「北嶋さん、寝屋止めだ！　大きいぞ！　それ行け。必ず上から静かに寄るのだぞ」と怒鳴っていた。北嶋氏は待ってましたとばかり、犬たちの鳴き声めがけてぶっ飛んで行った。私はその後ろ姿を見送りながら、シーバーを握り、「全タッ注意、猪が出ましたよ」と告げる。

私はゆっくりと小峰伝いに北嶋氏の後を追って、犬たちの鳴き声のちょうど真上に立ち、静かに様子を見ることにした。

寝屋止めだ。さあ、撃ってみろ

この時のために、大切だと思う猪撃ちはすべてやって見せてきた。さあ、この勝負はお前に任せた。やってきたとおりに、堂々と戦ってみろ。お前ならば必ず勝てるはずだ。

そんなことを思いながら、峰筋にある一本の大きなナラの木を背に、気になる北嶋氏と犬たちの動きを音で判別しようと眼下に広がる篠竹の藪をじっと見据えていた。犬たちは「大物だぞ！　早く来て……」と言っているように、三頭で猪を寝屋でそのまま止め切っている。

その現場は何と、昨日一四七キロの大猪と激戦した真竹藪からわずか一〇〇メートルくらいしか離れていない小さな尾根の反対側だ。まるで昨日の荒猪獲りを再現したように、素晴らしい止め鳴きが篠竹藪からわき上がり、恐ろしいまでの迫力である。

「グォーッ、グォーッ」と犬たちを威嚇しながらの猪が突いて出る反撃は、地響きまでも聞きとれ、気が気ではない。

幸いなことに、激戦で聞かれる大物の牡猪特有の、牙を鳴らして攻撃するガチャガチャ音がないので、牝の大物のようだ。「牝猪」ということで、ひとまず北嶋氏が戦う上ではホッとしたが、犬たちにとっては心配である。

このようにびっしり茂った篠竹藪の戦いでは、猪の牝が一番手強い相手である。犬が足を折られたり、猪に抱き込まれるようにお腹の下ですりつぶされるのである。

そうなったら犬はまず助からない。自分で駆け寄れば、どんな藪であろうが十分もあれば充分で、こんな心配もないのだが、どうにもならない。そんな心配も何のその、犬たちはますます元気で猪を完全に止め切っている。

ヨシ号、マロ号、シロ号の三頭は咬み止め、鳴き止めを自在に操ることができる、わが犬舎自慢の犬たちである。まるで昨日の予行練習の再現のように一致協力して攻め立て、猪を一歩も動かさない。こうなったらもう絶対に猪を逃がさない。

祈るような気持ちで銃の鳴るのを待っているが、なかなか銃が鳴らない。北嶋氏はもう何度も私と一緒に止め現場にぶっ飛んでい

る。この時のために、とっておきの大技も見せている。「大丈夫だ。必ず撃てるはずだ」と思いながらも心配で、じっとしていられない。

昨日の止めた現場は真竹藪だが、山が少しきつい。それに比べ今日の現場は同じようにぎっしり生い茂った篠竹藪だが、山はなだらかだ。猪には寄りつきやすいようだが、反対に犬たちに下から攻め立てられているので、猪は逃げ道を断たれ、小峰に飛び上がって来るかもしれない。念のために北嶋氏の後ろを守るつもりで、銃を突き出して待っていた。

「おかしいなあ」

すぐ下二〇メートルくらいの所なので、もうとっくに寄りついたはずなのに。北嶋氏は犬たちと猪の動きに合わせ、撃つタイミングを必死で計っているのだろうが、それにしても遅すぎる。やきもきしていると、カサカサと登って来る足音がする。やっぱり来たなと銃を突き出していると、ひょっこりマロ号が顔を出した。

「オヤジ、何してるんだよ。なぜ早く来ないんだよ」というように、さかんに尾を振り、クンクン鳴きながら飛びついてきた。

「しまった……」

北嶋氏が寄りついたので、マロ号は待ちきれずにいつものように私を迎えに来たのだ。「よし、よし、ジジが悪かった。よし、マロ行こう！」と、一時でも早くマロ号を現場に戻らせるために篠竹藪に踏み込んだ。マロ号は安心したように一目散に藪に消えて行った。

その間も、ヨシ号とシロ号は犬たちで申し合わせていたようにしっかりと鳴き続け、猪に逃げる隙を与えず、必死で私を待っているようだ。二頭では飛ばれるのではと心配していると、またマロ号の元気な声が加わった。

「よし、これで大丈夫だ」

こうなったらマロ号たちは絶対逃さず、何時間だって止められる。焦ることはない。北嶋君、焦るなよ。頑張れ。

「遅ればせながら俺も行く。必ず後ろで守ってやるから……」

少しずつ下におり、様子を見ようかと篠竹藪に踏み出した、その時である。

「ズシーン」

地面に突きささるような、待ち焦がれた銃声一発。その轟音をかき消すような北嶋氏の絶叫である。

「止めた！」「止めた！」「止めた！」「止めた！」「止めた！」「止めた！」「止めた！」

その数、実に七回である。私はびっくりして、「全タッ注意、全タッ注意。猪が飛んだぞ！」と怒鳴っていた。北嶋氏の声があまりの興奮で絶叫したので、すぐ近くの私には「飛んだ！」「飛んだ！」と聞こえたのである。

一気に駆け下りてよく見ると、マロ号たちが大猪に狂ったように咬みつき、勝った喜びを爆発させている。

その前で、「止めたぞ！」「止めた！」と、北嶋氏も狂ったように叫び、大喜びである。まず北嶋氏に駆け寄り、「よくやった。よかった。よかったなあ……おめでとう」とガッチリ握手、心から喜び合っていた。

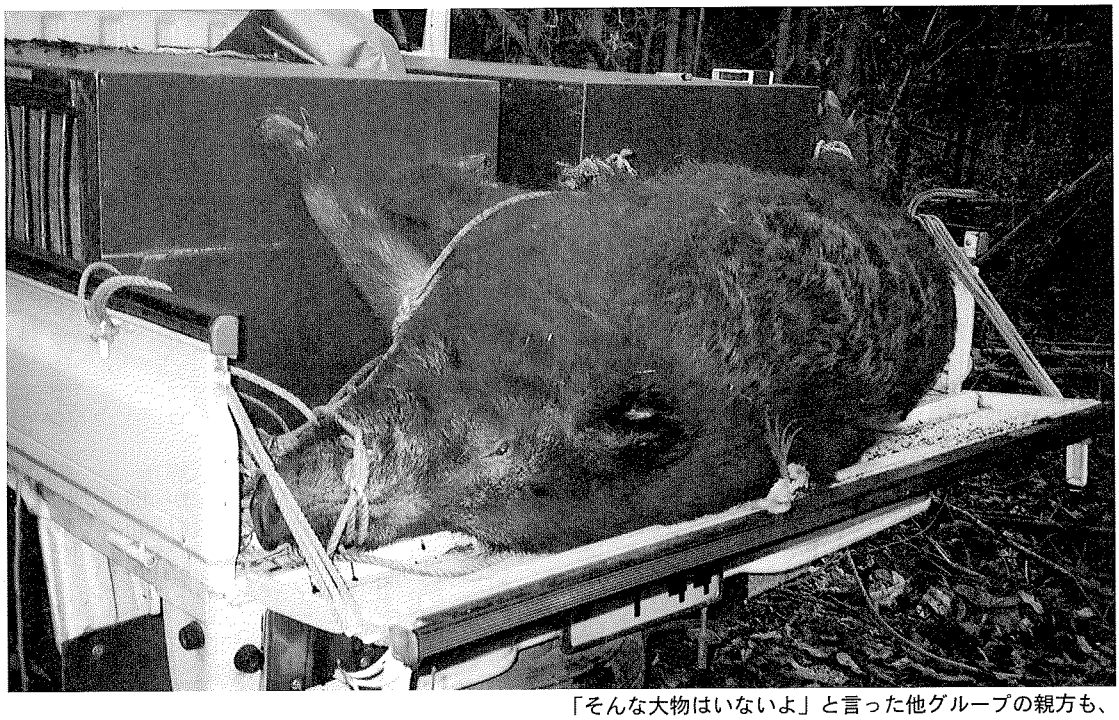
大猪を撃ち獲った知らせで現場の周りには、にわかに歓声が上がり、私はやっと安心して胸を撫で下ろしていた。みな思った以上の上達ぶりで、猪の止め現場のすぐ下を加藤君がしっかりと守り、平野氏も棟方氏もそれを取り囲むようにキチッと布陣していたのである。

北嶋氏の気迫や手順はたいした成長で、昨日予行練習で教えたとおりの見事な攻め方である。いつも私がやって見せてきたことと全く同じで、寄り方も完璧なもので、五メートルから見事、猪の眉間に撃ち込んでいた。私はそのことを確認。「よくここが狙えたね。たいしたものだ」と感心し、ここまでできるようになったことがわがこと以上にうれしかった。

「北嶋さん、お見事。これで立派な猪撃ちの親方だ」と思っていた。北嶋氏も、やっと落ち着きを取り戻したように話し始めた。

田宮さんに教えられたとおりに静かに上から寄りつき、五メートルで犬たちと猪の激戦を見ていると怖くて、恐ろしくて、早く田宮さんが

寝屋止めをキチッと決めた北嶋氏（左）と私。念願の大輪、見事に咲く



「そんな大物はいないよ」と言った他グループの親方も、これを見れば「本物の大猪」と納得するはず

来てくれないか……と思ったそうである。

いくら待っても来ないので、言われたとおりに撃つタイミングを計っていると、猪は下から攻め込む犬たちを嫌って、上にいる北嶋氏に向かって突いて来た。そこを一発狙い撃ったのであるが、「猪は本当に犬よりも人に向かって突いて来るものだね。怖くて、恐しくてたまらなかったよ」と身ぶり、手ぶりで説明、興奮醒めやらぬようである。

さかんに「ありがとう」と言っているが、一番感心したのは「マロ、ありがとう」「ヨシ、ありがとう」「シロ、ありがとう」と、一頭ごとに声をかけ、撫で回していることである。

私は前記のとおり、猟技術や猟法も大切なことであるが、若い彼らに特に教えてやりたかったのは猟人としてのメンタルな部分、つまり精神的なことを完成させるのが重要であると考えていた。

その第一が犬たちに対する感謝であると思っているので、私が犬たちに対して常に思っていること

も、いつもやって見せてきたのである。北嶋氏はそんなことまでもキチッと実行しているのだ。

どんなに猪猟が上手でも、人格の備わらないことには何の意義もない。猪が怖いとか恐ろしいなどとはプライドが先走り、なかなか言わない自称名人が多い中で、思ったことをこんなに素直に言ってくるその気持ちが何よりで、彼の大器ぶりが偲ばれ、本当にうれしくなっていた。

北嶋氏は「俺は一生この感激を忘れないぞ！」と大声で言っているが、誰だって初獲りの猪を忘れるはずがない。特にこんな大猪の牝をものの見事に撃ち獲ったのだから、猪猟の虜になり、どっぷりとはまりこむのも当然のことである。

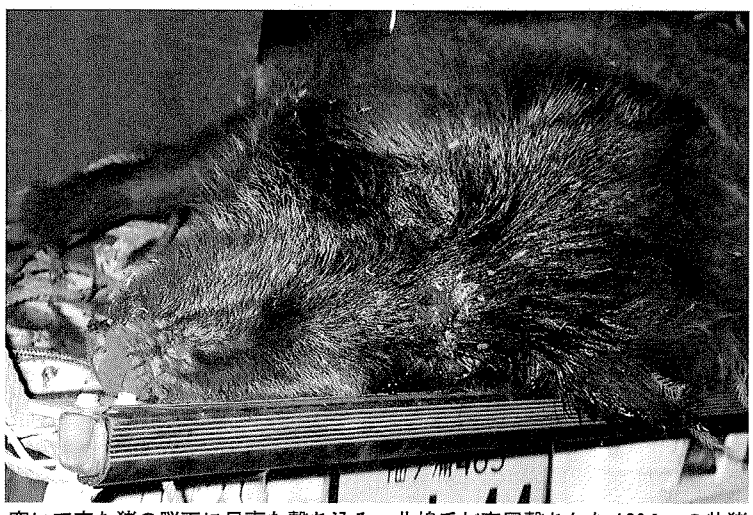
頃合いを見計らって犬たちに話しかけながら、猪から引き離し、北嶋氏と二人で車まで引き下ろしたが、全犬無事でかすり傷もない。赤く染まったシロ号は猪の返り血であった。

どんなに大猪を獲っても、犬たちが大ケガでは楽しいどころではない。あくまでも完勝することであり、決してケガのない猟犬こそが、猪猟を楽しむ原点である。引き返して改めて現場を見ると、すぐ横に猪の寝屋があり、その前にどっかり大猪が倒れている。

「これが寝屋だね」と私が言うと、集まったみんなもびっくりしたようで、「寝屋でそのまま止めていたのだね」と言う。

ワイワイ、ガヤガヤ、口々に大声で話している中でひときわ面白かったのが、北嶋氏の「止めた！」「止めた！」である。現場の真下まで寄りついた加藤氏も、「飛んだ！」「飛んだ！」と聞こえたそうである。「飛んで来たら、一発のもとに……」と当然力が入ったとのことであるが、本当に大声で、びっくりする絶叫であり、私も今までに聞いたことのない北嶋氏の喜びの大爆発であった。

喜びの中、地獄の引き出しも平野氏のお陰で良い道ができ、五人であるからまたたくまに車に横づけである。若い力で一生懸命引き出してくれたみんなのお陰で、私



突いて来た猪の脳天に見事な撃ち込み。北嶋氏が寝屋撃ちした120 kgの牝猪

120 kgの大猪（牝）を前に、喜びの関東猪犬猟山彦会千葉支部会員。
左から棟方、加藤、平野、北嶋の各氏と私

はどさくさにまぎれての好きな写真がやっと撮れた。

私としてもこの一戦は心に残るもので、北嶋氏と大猪は記念に撮っておき、想い出としたいものである。

大一番を見事に制した忘れられない感動を境に大きな自信となり、何事でも前進するのである。猟人だって、犬たちと同じように真剣勝負に勝つことで成長し、感動をどんどん重ねる先に名人であったり、名犬が完成するのだと思う。

北嶋氏には四年間というそれなりの土台ができていて、その上、三十七歳という若さである。名人にだって、名犬作りだって、やる気があるのだから決して夢ではない。私は目の前で大きな猪猟の壁をこれほど見事に乗り越えた北嶋氏の勇姿に、自分にできなかった大志をかけていた。

「よしよし、よくやってくれた。ありがとう、北嶋さん」と心から満足していた。

思えば初猟以来、自分にできる最高の物を残らず出して、「何もかも覚えてほしい」と一生懸命に頑張ってきたのだから、これくらいの猪撃ちは当然できるだろうと思っていたが、それにしても実に立派な完成である。

基本がキチッとできていないと、どんなに頑張ったところで、まずもってこの撃ち込みができるものではない。もう北嶋氏はどこに出しても恥ずかしくない堂々たる親方である。夢の大輪を、まさに自らの失敗と苦労を肥やしに美しく咲かせたのである。

私にとっても「猪猟をやってきてよかったなあ」とつくづく思う最高の一時である。人様に元気で、自分で編み出したこだわりの物事を気兼ねなく教えてやって、その成果を心ゆくまで褒め、喜び合う。そんな感動がよいのであって、何事にも勝る幸せなことかもしれない。

少し理屈ぽくなったが、北嶋氏の初獲りに対するものは大変なもので、奥様や子供たちをまるごと巻き込み、会員も含めた大祝勝会になった。

「北嶋さん、自分で撃った猪肉はうまいもんだろう」と私がからかうように言うと、純心な北嶋氏は「本当だよ、どんなに言われたって、実戦を見ないと決して分からないし、あの怖さや決めた時の感激は撃った者でないと分からない」と真剣に返ってきた。横から加藤氏も自信ありげに、「あそこで飛び下りて来たら、俺が決めていたな。だけど、まずは大将が撃ってからが順番。次は俺が……」と意気込んでいる。

平野氏も「牝猪でこんな大きなのは初めてだ。千葉で珍しいよ」と言っている。奥様も「本当に撃ったの」と、北嶋氏にさかんにその時の様子を聞いているが、良い家族で、子供たちもみな猪肉が大好きだ。

ただ一つ残念なことは、今日は海ほたるを通って川崎に帰る大仕事が残っているので、昨日に続いてのうまいビールはいただけない。お茶の嫌いな私は水をぐいぐいあおる。盛り上げてやりたいが、早めに切り上げ、疲れた体で高速道に乗る。

「さあ、帰ろう。お前たちも疲れたろう」

「マロ、ありがとう」「ヨシ、ありがとう……」と、独り言のように全犬の名を次々に呼ぶと、返事をするようにクンクン鳴く子もいる。みな、お前たちのお陰だ。

自慢できる激戦の場を必ず作ってくれ、これ以上ない感激をいつでも味あわせてくれる。俺はお前たちのお陰で名勝負もできるし、どでかいことまで言い切れる。この年になってもキチッと止め撃ちができるのは、お前たちがぞっくりついているからだ。

海ほたるの上空には羽田に降りる飛行機のライトが、海には漁火が点々と灯る中、今日の締めくくりの安全運転が続く。

次は、犬の使い方と猪を刺す一戦を書きたいと思っております。

（つづく）

スポーツミックス
20kg5300円 7.5kg3500円
ドッグフード1袋が全猟を支えます
ドッグフードのご注文は全猟へ！